

夢窓国師が西芳寺を作り始めた頃、突然に後醍醐天皇が吉野で崩御されたため、急遽天龍寺を創建することになった。夢窓は両方の寺で龍門瀑のテーマで庭を作った。西芳寺は修行の滝であるが、天龍寺の鯉は修行の鯉ではなく、後醍醐天皇は既に示寂して、悟りに入っていないからならない。そのため鯉は龍門瀑に登りきって龍と化している。

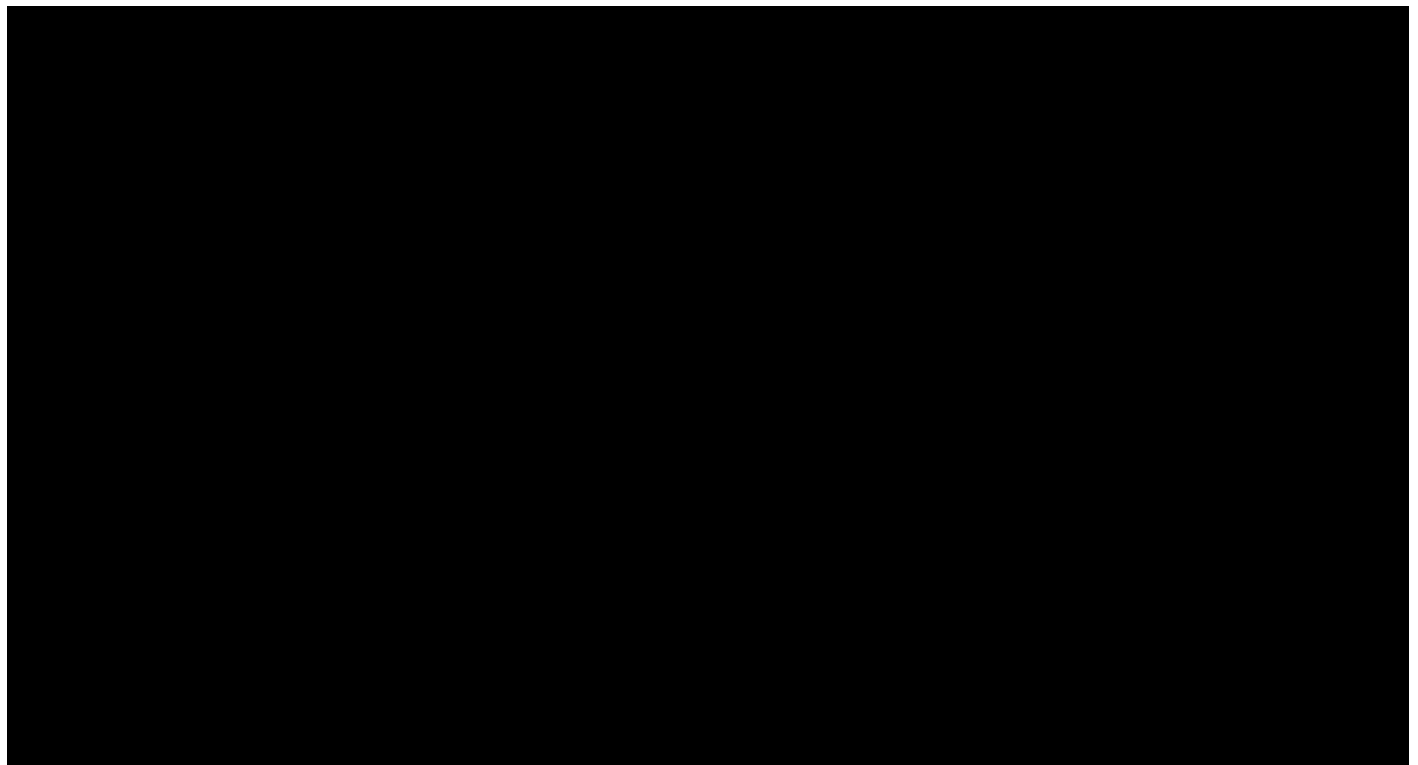
龍門瀑とは

天龍寺や金閣寺などにある滝の様式である。ともに中国の故事にある「登龍門」の由来である鯉が、三段の滝を登って将に龍に化す様を現している。中国南宋よりの帰化僧の蘭溪道隆禅師が中国の故事にある登龍門(鯉が死を賭してまで龍になるべく努力するさま)にならって、人間が観音の知恵を得る(悟る)まで、努力をしなければならないことを日本庭園の形で教えている。このテーマを夢窓国師が引き継いで、新しい庭園のスタイルを確立した。このようなわけで鎌倉、室町時代は庭園のメインテーマは龍門瀑の滝だ。



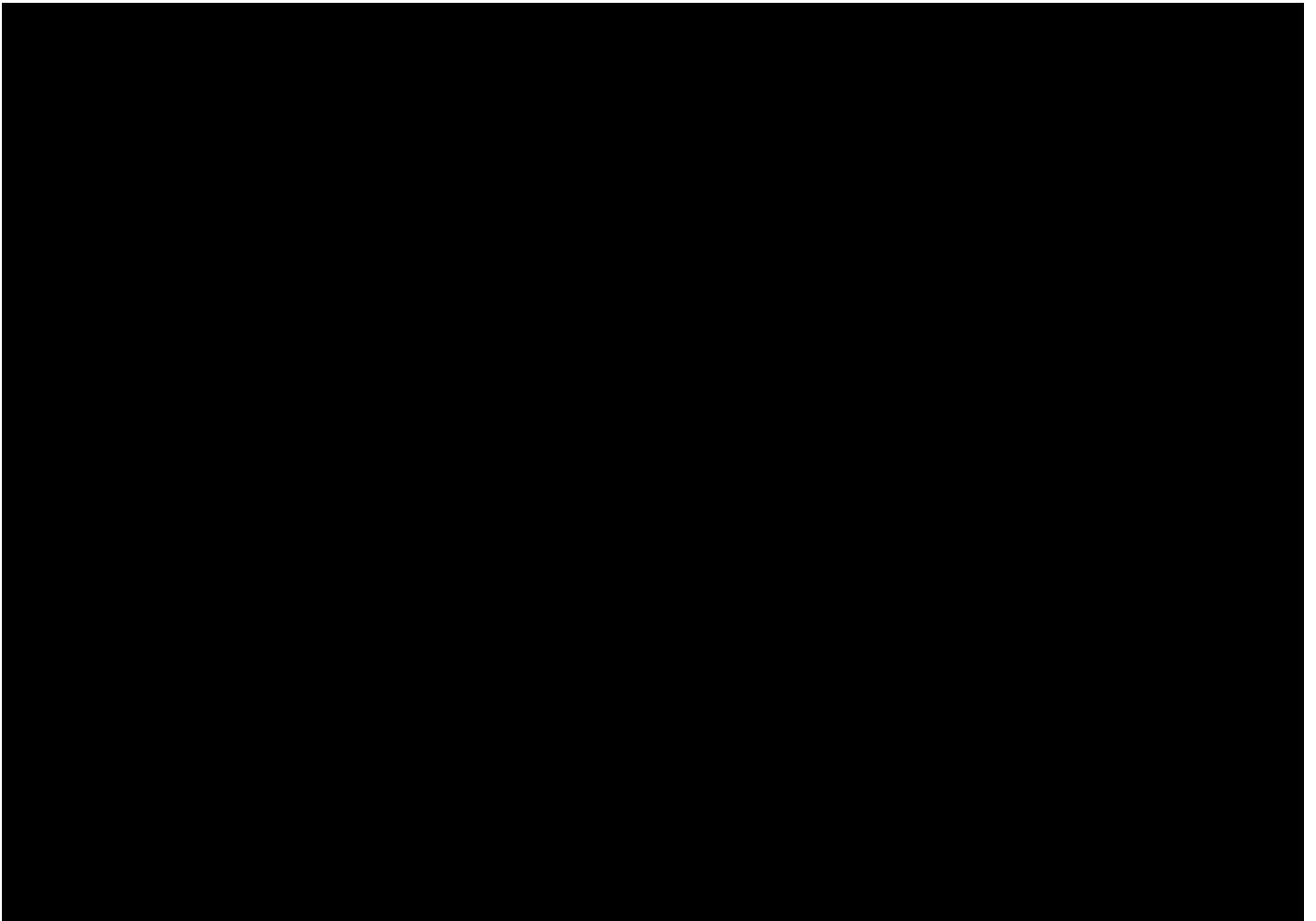
全景 画面右奥より龍門瀑、三橋式石橋、坐禅石。画面左側より荒磯・岩島。手前右側は出島、岩島

夢窓国師は従来の庭は池の中に鶴島、亀島があるのが常識であったのを、メインテーマを滝のみにした。しかし、この土地は後嵯峨天皇が作った池泉舟遊式の庭があった。夢窓国師が出島のあたりをどの程度改修したものかはハッキリしていない、と思う。このような出島形式は平安時代よりの伝統があるので、地割はそのままにして、そこへ石を置いたのだろうか。

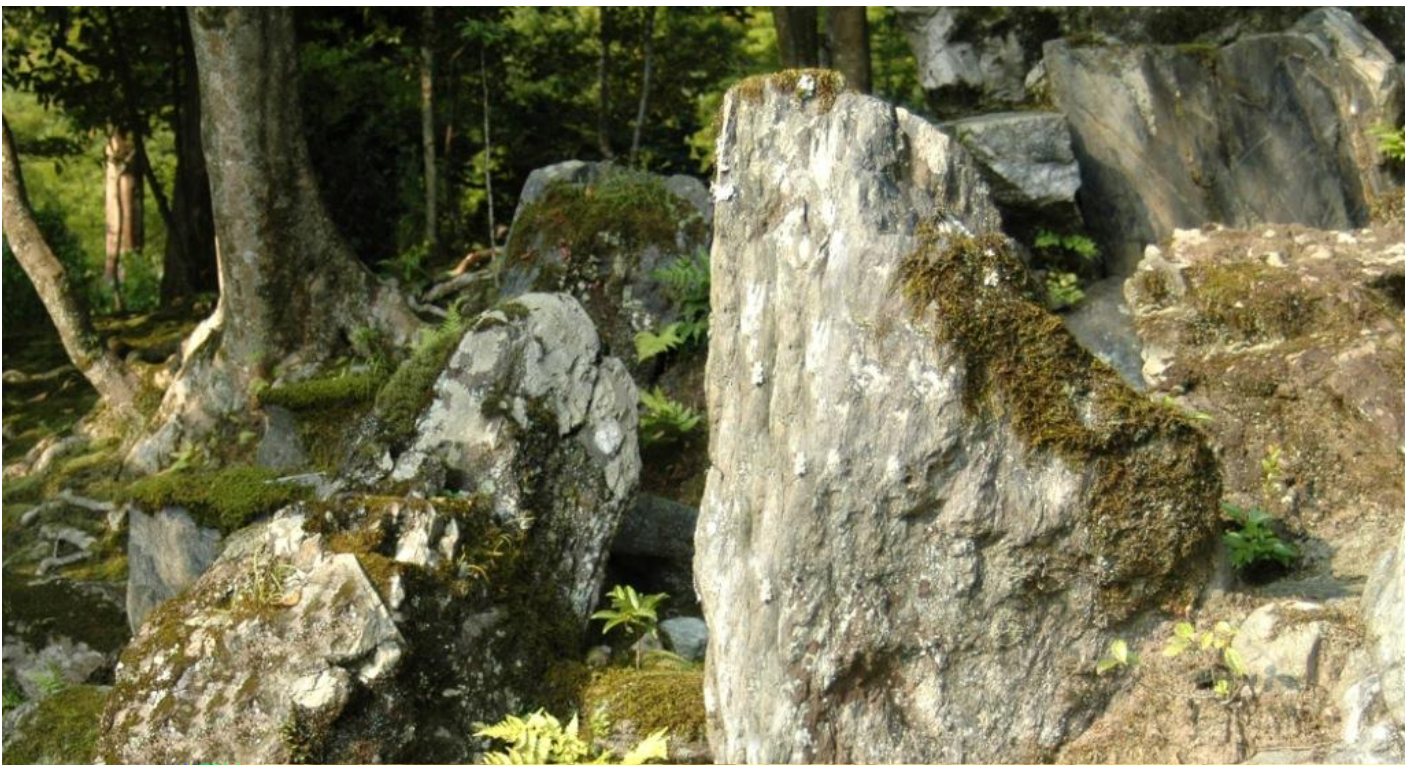


龍門瀑と三橋形式の石橋はいずれも後世の石組に影響を与えた。なお、この禅の庭は鑑賞のための庭として初めてのものである。

龍門瀑の鯉魚は既に最初の滝を登って、二段目の滝の先にある観音の世界に向かっている



洲浜の造形は池庭に奥行きを与える



龍門瀑の鯉魚石



碧巖石の原点は碧巖録の書かれた中国の「夾山」にある



碧巖石と下段の滝



三橋の原点



曹源池に面した坐禅石

臨川寺 夢窓国師終焉の地は天龍寺塔頭の臨川寺三合院



夢窓国師墓所の蓮華石